

# 月町遺跡発掘調査報告書

磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事に伴う発掘調査

令和3年3月

一関市

一関市教育委員会

## 序

一関市赤荻地区は、古くから交通の要衝であり、現在でも東北自動車道が南北に縦貫しています。縄文時代から人々の生活が確認でき、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在しています。

それらの一つに、月町遺跡があります。平安時代の散布地で、土師器を確認している場所です。東北自動車道の建設工事に先立ち、昭和49年（1974）に岩手県教育委員会による踏査が行われていますが、この際には遺構、遺物とも確認されませんでした。

このたび、公共下水道の整備の一環として、月町地区枝線工事を実施するにあたり、市教育委員会による緊急発掘調査を実施しました。この調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際しては工事関係者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

令和3年3月

一関市

市長 勝部 修

一関市教育委員会

教育長 小菅 正晴

# 例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和2年度に実施した月町遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、一関市下水道課が実施する磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事に伴い、工事立会で遺物を確認した範囲及びその周辺の掘削を受ける範囲の記録保存を目的とした発掘調査である。
- 3 調査対象地は、月町遺跡（一関市赤荻字月町63-3地先）である。
- 4 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。また、岩手県教育委員会の協力を得た。

- 5 調査体制は以下のとおり。

一関市教育委員会 文化財課	課長	千葉 浩
	文化財係長	金野 修
	主任学芸員	菅原 孝明
	文化財調査研究員	畠山 篤雄
	文化財調査研究員	光井 文行
	文化財調査研究員	阿部 充
	会計年度任用職員	菅原 友明
岩手県教育委員会 生涯学習文化財課	文化財専門員	佐々木 務
	文化財専門員	高橋 祐
	文化財専門員	長屋敷 淳史

- 6 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は畠山が行った。
- 7 土層断面図の土色表示は新版標準土色帖1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 8 調査に係る環境整備業務は、磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事を請け負った鈴木工材株式会社が担当した。
- 9 出土した遺物の鑑定については、八重樫忠郎氏（平泉町観光商工課）の指導を頂いた。
- 10 調査協力者・機関（敬称略・50音順）  
足野良五、岩渕敏男、荻荘吟子、佐藤剛一、宍戸和弘、宍戸文子、高橋浩典、千葉信胤、  
畠山倉蔵、八重樫忠郎、山川純一、吉田信安、渡辺正巳  
赤荻歴史遺産保存の会、芦東山記念館、曾慶市民センター、大東図書館

# 目 次

序	1
例言	3
目次	4
I 一関市の位置と環境	5
II 月町遺跡	
1 遺跡の位置と地理・歴史的環境	7
2 調査に至る経緯	9
3 調査結果	10
4 まとめ	16
遺物観察表	18
写真図版	22
III 赤萩焼について	34
IV 資料	38

# I 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに平成23年（2011）9月26日藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km<sup>2</sup>である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（標高1626.5m）を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」（昭和43年《1968》）や北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」、（平成17年《2005》国指定）および重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年《2006》）国選定）、下流部には変化に富んだ溪谷景観をなす名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年《1927》国指定）がある。東側には、同じ北上川水系の砂鉄川流域に、名勝「猊鼻溪」（大正14年《1925》国指定）がある。室根山（標高895.5m）から黄金山（481.6m）の南に続く山稜は分水嶺となり、東側は気仙沼湾に注ぐ大川、また、気仙沼市本吉町小泉の赤崎海岸で大平洋に注ぐ津谷川がある。

また市内の著名な文化財には、重要文化財「鉄五輪塔地輪」（花泉町涌津）（昭和55年《1980》国指定）、重要文化財「木造観音菩薩坐像」（大東町渋民）（平成30年《2018》国指定）、重要無形民俗文化財「室根神社祭のマツリバ行事」（昭和60年《1985》国指定）がある。

（岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集より転記、一部加筆）

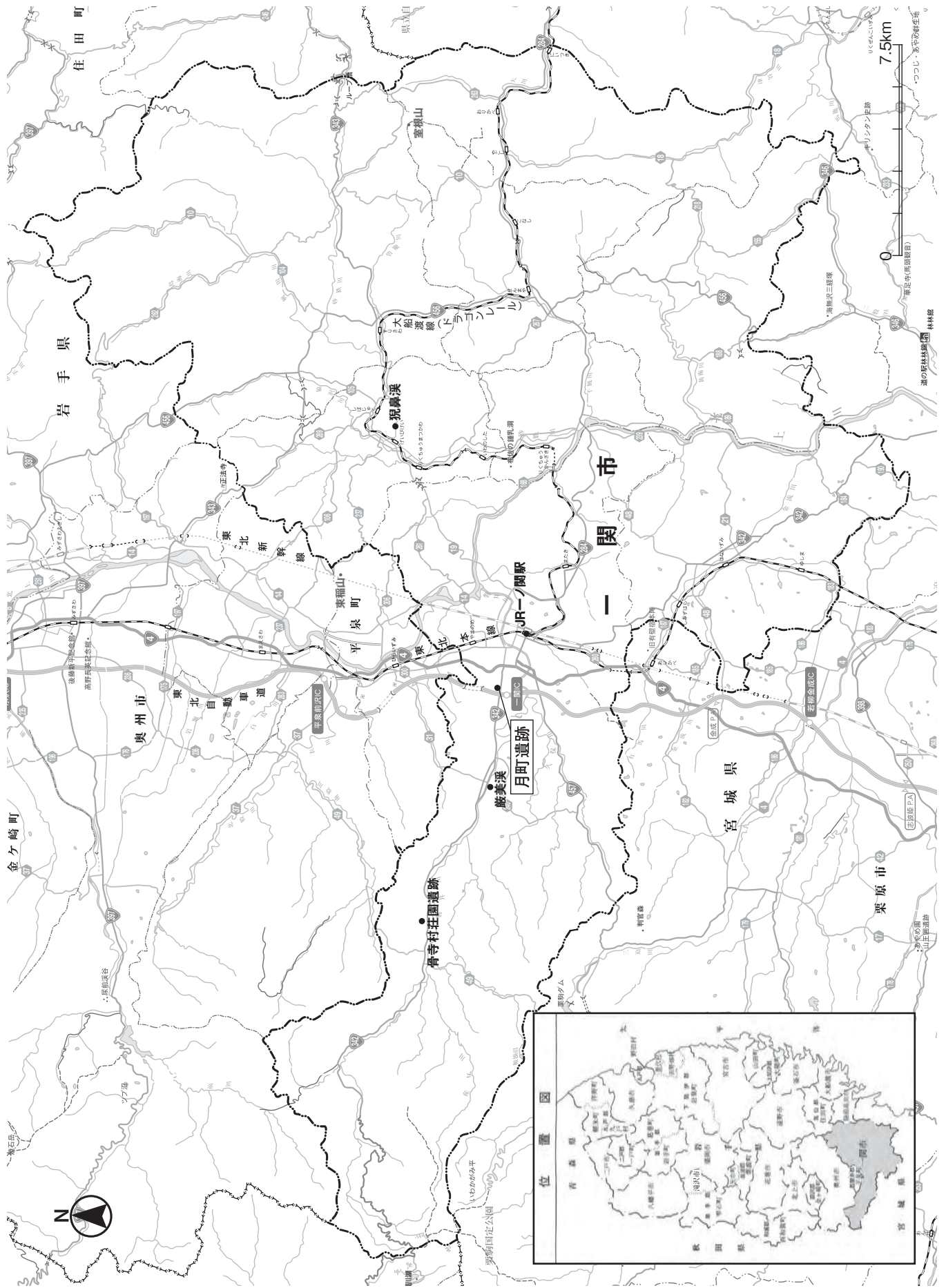


図1 月町遺跡位置図

## Ⅱ 月町遺跡

### 1 遺跡の位置と地理・歴史的環境

#### (1) 遺跡の位置と地理的環境 (図2)

月町遺跡は、JR東北本線一関駅の西北西3kmに所在する。遺跡の北側は、烏森(標高193m)から泥田山(112.2m)にかけて東に延びている。小さな沢が発達し谷筋を形成し沖積地に流れ込み山根堰に注いでいる。この谷筋も水田の水源となっていたものと見られる。丘陵山裾の沖積地との境には、集落をつなぐ道と並行して照井堰から分流した山根堰が通っている。

遺跡は、この丘陵南側の沖積地に位置する。遺跡地内は、道、水路、会社用地等である。遺跡の西側を東北縦貫道が通り、南側には一関インターチェンジがあり、周辺は宅地化が進んでいる。東北縦貫道の開通と共に開発が進み大きく環境が変貌した場所である。

#### (2) 歴史的環境 (図2、表1)

本遺跡は、埋蔵文化財包蔵地で平安時代の散布地として登録されている。周辺には古代から中世にかけての遺跡が分布する。大別すると「古代の寺院跡」、「中世城館跡」、「窯業生産遺跡」、「その他」に分類される。

「泥田廃寺跡」は岩手県指定史跡として著名な古代の寺院跡である。昭和49年(1974)から発掘調査が行われた。調査の結果、出土遺物等から平安時代(10世紀前半頃)の寺院跡であると推測されている。

中世城館跡は、3か所確認されている。宮田館、赤萩館(日光館)、若宮館(中条館)である。赤萩館は字宿に所在する。「宿」の地名の起りは中世城館の城下に形成された「市」的な場所を推測させる地名である。赤萩山栗津院や正慶山観音寺は、赤萩の歴史に大きく関わって現在に至っている。

赤萩焼遺跡は、文化年間(1804~1818)に阿部幸右衛門が窯業を創業した場所である。明治時代になり萩荘と改姓している。赤萩焼は宮田焼とも称されている。甕やすり鉢等日用品の製作が主であったが、東北本線の開通に伴い鬼死骸トンネル用の赤レンガ、磐井橋鉄橋工事に用いるレンガの注文もあったりした。赤萩焼については別項で述べる。

(畠山)



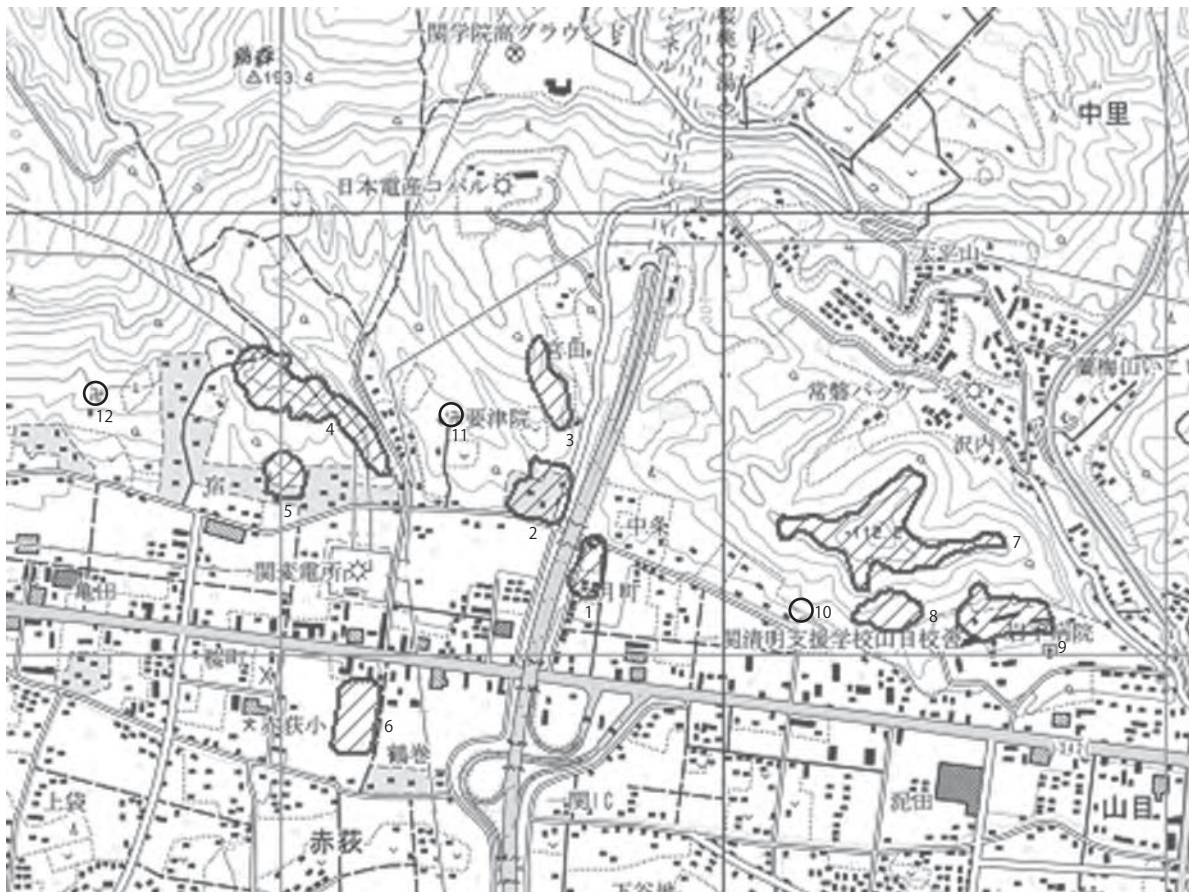


図2 調査遺跡および周辺遺跡位置図（岩手県遺跡情報検索システム（令和元年度データ）に1万分の1地形図を抜粋加筆）

番号	名称（遺跡名）	所在地	時代	種別	出土遺物	文献	備考
1	月町	赤萩字月町	平安	散布地	土師器		
2	赤萩焼	赤萩字宮田	近世～近代	生産遺跡		『赤萩焼の研究』	
3	宮田館	赤萩字宮田	中世末	城館跡		『岩手県中世城館跡分布調査報告書』他	
4	赤萩館（日光館）	赤萩字宿	中世	城館跡		同上	
5	磐井駅擬定地	赤萩字宿	平安	駅家跡			
6	弥悦塔	赤萩字桜町	近世	墳墓			
7	若宮館（中条館）	赤萩字中条山目字館、字泥田山下	中世	城館跡		『岩手県中世城館跡分布調査報告書』他	
8	泥田廃寺跡 B	赤萩字中条、字泥田山下	縄文、平安	寺院跡	土師器、須恵器、礎石、瓦、石器	一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集「泥田廃寺跡」	岩手県指定史跡
9	泥田廃寺跡 A	山目字泥田山下	平安	寺院跡	土師器、須恵器、礎石	同上	
10	若宮八幡宮	赤萩字中条				『一関市史第四巻』『山目史』他	
11	栗津院	赤萩字宮田				同上	
12	観音寺	赤萩字宿				同上	

表1 周辺遺跡及び寺社一覧



## 2 調査に至る経緯

令和2年(2020)7月3日、一関市下水道課から文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出された。埋蔵文化財包蔵地である月町遺跡の範囲内で、磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事を実施する目的である。本工事は全て舗装道路を掘削する工事であったことから、事前の試掘調査は実施せず、7月6日付け教文第04005号文書で工事立会を勧告した。本工事に先立ち、下水道管の位置を確かめる下水道の試掘調査が工事範囲のうち8か所で実施される計画であったため、その試掘調査に立ち会うこととした。7月13日、15日、16日の工事立会の結果、工事範囲の北西角にあたる2トレンチから陶磁器片5点を確認した。他のトレンチからは、遺構・遺物は確認できなかった。

工事立会の結果を受けて下水道課と協議を行い、工事内容の変更ができないとの結論に至った。そこで、遺物を発見した部分の周囲に遺跡がどのように広がるかを確認するため、改めて通知の提出を依頼した。そして、7月27日に埋蔵文化財発掘の通知が提出され、これを受けて7月28日付け教文第04016号文書により工事に際して事前の発掘調査を勧告した。

発掘調査は一関市教育委員会が実施することとしたが、7月から一関市大東町摺沢字但馬崎に所在する八丁館遺跡の緊急発掘調査を実施していた。調査員の不足により同時に発掘調査を進めることが困難であったため、岩手県教育委員会に職員の派遣と調査指導を依頼するなど日程を調整し、9月から発掘調査を開始した。

(菅原)

### 3 調査結果

今回の調査に至る経緯は先に述べたが、磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事に伴う下水道の試掘調査に対し工事立会を実施した。その結果、溝跡、磁器片2点、陶器片3点の出土があった。以上のことから、工事に先立ち記録保存を目的とする発掘調査を行った。調査箇所は、地域の生活道路である為、発掘範囲のトレンチを毎回埋め戻すなど制約のある中で調査を進めた。

#### (1) 工事立会

令和2年7月13日、15日、16日の3日間工事立会を行った。遺跡範囲内にT1～T6迄6か所のトレンチを設置した。このうち、トレンチ2（T2）から溝跡1か所、陶磁器片5点を確認した。他のトレンチからは遺構・遺物は確認できなかった。

##### ア 遺構

幅約0.7m、長さ約4mのトレンチ2（T2）の下層から確認した。溝跡の埋土は砂質である。範囲が狭隘である事から、溝の性格は後日の調査に委ねることとした。

##### イ 遺物

出土確認した遺物は、陶磁器片5点、自然遺物珪化木片1点である。陶磁器片は、表2のとおりである。内訳は、素焼き陶器片1点、陶器片2点、磁器片2点である。

素焼き陶器片は、大型の深鉢若しくは甕の口縁部と見られる。口縁部は平らで幅2.6cmである。



図3 工事立会トレンチ位置図 T1～T6

トレンチ 1 (T1) の基本層序は、以下のとおりである。

- I a 層 アスファルト層、層厚約13cm
- I b 層 碎石層、層厚約15cm
- II 層 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト層、しまっている、粘性なし、径2mm大の小石を少量含む。  
層厚さ約20cm
- III 層 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト層、しまっている、やや粘性あり、径2～6cm大の小石を少量含む、層厚約35cm
- IV 層 10YR4/4褐色砂質層、しまっていない、粘性なし、径5～10cm大の小石をやや多く含む、  
層厚約50cm
- V 層 10YR4/1褐灰砂質シルト層、しまっていない、粘性あり、層厚不明

## (2) 本調査 (令和2年9月7日～17日)

工事立会で溝跡及び陶磁器片の出土したトレンチ 2 (T2) を中心に、工事施工範囲で遺構・遺物の広がりを確認しながら調査を進めた。調査面積は、14.2㎡である。測定の基本座標値は、基点 1 (X=-117739.965、Y=23688.565 H=52.670)、基点 2 (X=-117741.434、Y=23680.771) である。調査箇所の基本層序は次のとおりである。調査区及び土層断面は図 4 のとおりである。

トレンチ 2 (T2) を拡張した調査区を二つに分けて、水路横断部分より西側を I 区、東側を II 区とした。

基本の層序は次のとおりである。

- I a 舗装AS
- I b 舗装碎石
- II 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト、しまっている、粘性なし、径2cm大の小円礫を少量含む
- III a 10YR7/3にぶい黄褐色シルト、しまりやや強い、粘性中
- III b 10YR5/6黄褐色砂質シルト、しまっている、粘性ややあり、径2～6cm大の小円礫を少量含む
- IV a 10YR3/2黒褐色粘土質シルト、しまりやや強い、粘性やや強い、径10cm大の礫を全体に微量に含む
- IV b 10YR4/4褐色シルト、しまり中、粘性やや弱い、礫(径5mm)全体的に極微量含む
- IV c 10YR3/3暗褐色シルト、しまり中、粘性中、礫(～5mm)全体的に少量含む
- IV d 10YR4/2灰黄褐色シルト質、しまりやや強い、粘質やや強く、(グライ化)
- IV e 10YR4/4褐色シルト、しまり中、粘性やや強い
- IV f 10YR3/3暗褐色粘土質シルト、しまり中、粘性やや強い、礫(径～10cm大)を全体的に微量に含む
- IV g 10YR5/3にぶい黄褐色シルト、しまり中、粘性やや弱い
- IV h 10YR5/3にぶい黄褐色シルト、しまり中、粘性やや弱い、礫(径～10cm大)を全体的に微量に含む
- V a 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト、しまりやや弱い、粘性やや弱い、遺物包含層
- V b 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト、しまりやや弱い、粘性弱い、遺物包含層
- VI 10YR4/1褐灰色砂質シルト、しまり弱い、粘性中、地山

遺物包含層は V a、V b である。

調査の区域は図 4 のとおりである。市道内に調査区域を設定している。

なお、工事立会において溝と確認した箇所は、調査範囲を拡張した結果、砂質の流れ込んだ堆積層で溝状には確認出来なかった。遺物の多くは、この堆積砂層の中から出土した。

### (3) 出土遺物

出土した遺物を大別すると、陶器、磁器、窯道具、その他である。176点の遺物が出土した。陶器には、素焼きの釉を掛けない半製品、釉が掛けられた製品がある。何れも破片で出土した完形品は1点である。

磁器は、搬入品とみられる破片である。窯道具は、完形品、破片、製品が付着した破片等多様である。46点と全体の26.1%を占める。

その他は、ガラス製品の破片、木炭片、珪化木化石片である。表3陶磁器観察表、表4窯道具観察表としてまとめた。

#### ア 陶器 (表3、写真図版7、8)

出土遺物の大半を占める。破片が多い。小片も多く器種部位を明確に判断できなかった。素焼きの半製品の破片も多い。半製品は、釉を掛ける前の素焼き段階のものと考えられる。製品は、破片が多い。断面は摩耗したものが少ない。釉は、外面内面に掛けたものが多い。器種は甕、播鉢、鉢類がみられるが、小片で器種・部位不明のものが多い。桔梗台に付着した甕の底部が出土している。(表3No.97、写真図版8)内外面とも釉を掛けられている。底部の推定径6.5cmである。

#### イ 磁器 (表3、写真図版9)

磁器の出土は数少ない。印判文様の皿・碗と推定される。口縁部が主である。

#### ウ 窯道具 (図5・6、表4、写真図版11、12)

芴ダンゴ(写真1No.1～9、スプーン状焼台(写真1、No.10)、桔梗台(写真2、No.11～22)、円筒状焼台、サヤ等である。芴ダンゴは、9点出土している。芴の痕跡が明瞭に確認出来るものがある。スプーン状焼台としたものは1点出土している。桔梗台には、台上面中央に円形孔が見られるものがある。(No.19、20)脚の低い四角のテーブル状の焼台と推定されるものがある、同一個体と見られる。(No.25～28)甕の底部と付着した桔梗台が出土している。(表3No.97、図6、写真図版12)桔梗台の脚は破損している。五脚と推定される。

#### エ その他 (写真図版10)

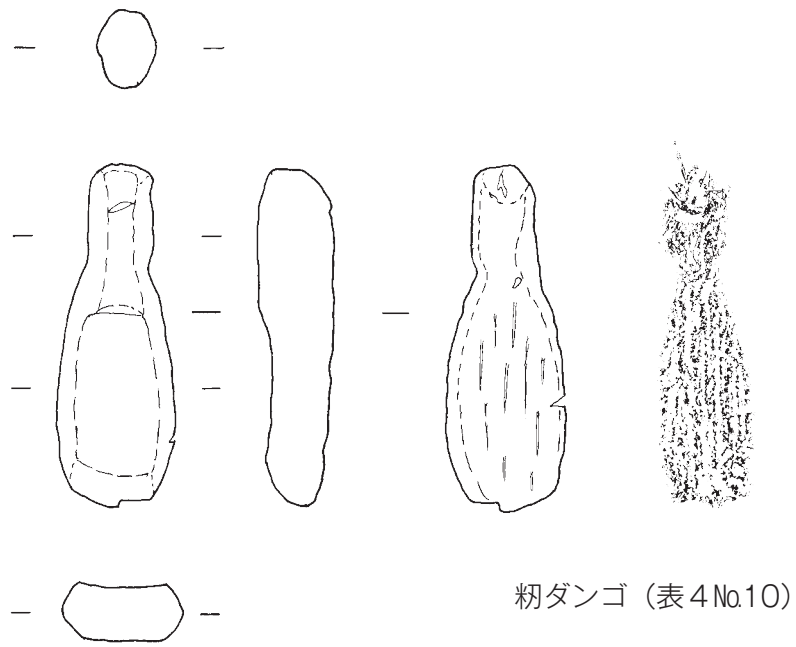
ガラス片、木炭片、珪化木片(自然遺物)、ガイシ片が砂層堆積層中から共伴している。ガラスビン破片は、ビンの胴部と推定されるものと広口ビンの口縁から頸部にかけてのもの2点である。

木炭片は陶磁器と共伴し発見されたものを採集した。層位の土を水洗し採集したものではない。

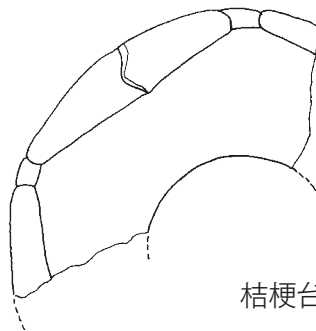
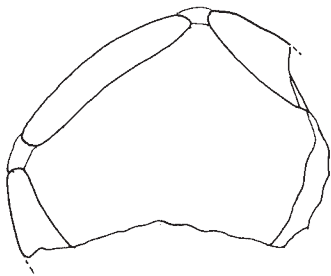
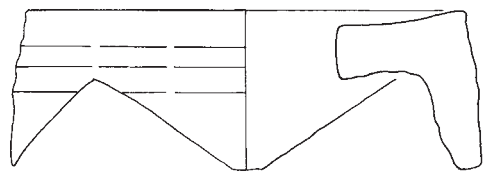
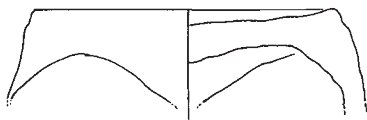
珪化木片(自然遺物)は、流出堆積時の混入と見られる。

(畠山)





粉ダンゴ (表4No.10)



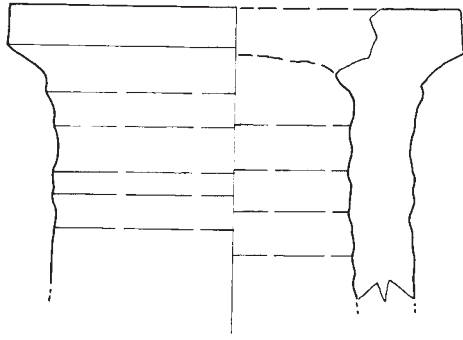
桔梗台 (表4No.18)

桔梗台 (表4No.19)

縮尺 $\frac{1}{2}$

図5 出土遺物 (1)

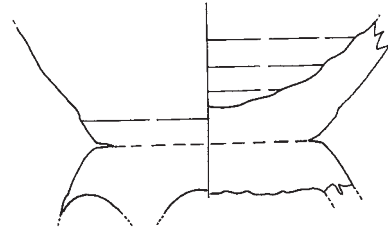




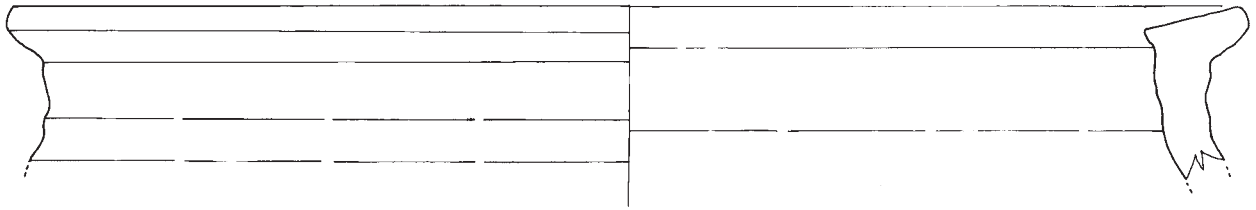
円筒状烧台 (表4No.24)



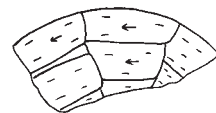
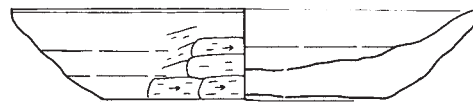
皿 (表3No.57)



甕底部 (表3No.97) · 桔梗台 (表4No.23)



甕 (表3No.112)



皿 (表3No.132)

縮尺 $\frac{1}{2}$

図6 出土遺物 (2)

## 4 まとめ

月町遺跡は、平安時代の散布地として埋蔵文化財包蔵地に登録されている。令和2年7月の工事立会、9月の発掘調査を実施し、その結果出土した遺物から見て、江戸時代後期から明治時代と推測される遺物が多くを占めている。

工事立会及び発掘調査の範囲は、包蔵地の北側の一部で、市道地下に敷設する下水道管の工事の範囲内であることから、限られた範囲の調査である。

### ①遺構

人為的に明瞭な遺構は確認できなかった。流水による堆積砂層と見られる中から遺物が集中して出土する。砂層の堆積状況から見て、短期間に堆積したものと見られる。

### ②遺物

出土遺物は、次の三つに大別される。

ア、焼き物の製品（陶器・磁器）

イ、窯道具（粉ダンゴ、桔梗台ほか）

ウ、その他（ガラス片ほか）

である。

出土遺物の多くは、近傍に所在した窯関係の廃棄物等が流出によって堆積した遺物と判断した。

陶器のうち、釉が掛けられたもの、素焼きのままのもの（半製品か）に大きく分けられる。また、焼成中に器物どうしが癒着し破損した遺物（No.98）や窯道具（桔梗台）の癒着した甕底部（No.97）も見られ、窯道具も出土する事から、近傍に所在した窯跡からの流出品と推測される。近傍に所在する窯跡は、埋蔵文化財包蔵地に登録されている「赤萩焼遺跡」がある。磁器については、遠隔地からの消費による搬入品である。

（畠山）

### 【参考文献】

- 1 芦文八郎1979『友慶 芦正太郎 陶山 芦文三郎 一その生涯と作品一』
- 2 阿部和夫1992「赤萩焼に関する資料」『研究紀要（第21集）』岩手県南史談会
- 3 阿部和夫1996『赤萩焼の研究』
- 4 一関市教育委員会2008『泥田廃寺跡第1～3次発掘調査報告書』
- 5 一関市教育委員会2018『赤萩館遺跡発掘調査報告書』一関市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 6 一関市教育委員会2020『上折壁城遺跡発掘調査報告書—住宅新築工事に伴う発掘調査—』一関市埋蔵文化財調査報告第28集
- 7 一関市史編纂委員会1978『一関市史第二巻』一関市
- 8 一関市立大東図書館2020『復刻版 東磐井郡曾慶村郷土教育資料』
- 9 岩手県教育委員会1980『東北縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書—V—』岩手県文化財調査報告書54集
- 10 岩手県教育委員会1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- 11 紺野 靖1993『岩手の国産陶磁器—出土遺跡と文献目録—』小杉山舎
- 12 関根達人1998「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』
- 13 曾慶史談会1993『曾慶の歴史をたずねて』

- 14 大東町教育委員会1972『文化財調査報告書—第三・四集—』
- 15 高橋 拓2009「東北近世窯における窯道具の転換的原因」『山形大学歴史・地理・人類学論集第10号』
- 16 東北大学埋蔵文化財調査委員会1994『東北大学埋蔵文化財調査年報7』
- 17 東北大学埋蔵文化財調査室2020『仙名城跡二の丸北方武家屋敷地区第14地点 第2分冊』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告8
- 18 野村将之2017「再興九谷松山窯の窯詰め技法について」『金沢大学考古学紀要38』
- 19 福島市教育委員会1998『岸窯跡』福島市埋蔵文化財報告書第111集 福島市、福島市教育委員会、財団法人福島市振興公社
- 20 藤沢町文化財調査委員会1985『藤沢の余光第二版』藤沢町教育委員会
- 21 三春町歴史民俗資料館2000『丈六焼 平成12年度春季特別展』
- 22 村上光一2001「郷里の陶磁Ⅰ—楽焼と小山文三郎伝—」『東磐史学第26号』東磐史学会
- 23 村上光一2006「郷里の陶磁Ⅲ—民窯曾慶軒畑窯の大水甕から—」『東磐史学第31号』東磐史学会
- 24 盛岡市公民館1969『岩手の陶窯』郷土資料写真集第12集
- 25 山目史を作る会1993『山目史』
- 26 吉田義昭1988「焼きもの」『用と美の世界 いわたの手仕事』（社）岩手県文化財愛護協会

表2 工事立会出土陶磁器観察表

No.	出土地点	種別	器種	部位	分類形状特徴	法量 (cm)			重量	装飾			胎土色調	備考	写真図版
						器高	底径	厚さ		絵付/釉薬	文様	装飾特徴			
1	T2廃土	陶器	甕	口縁部	半製品・破片			2.62	12.8	無し	無し				9
2	T2	陶器	碗?	胴部	製品・破片			0.53	7	内・外	無し				9
3	T2	陶器	皿?	不明	製品・破片			0.54	4	内・外	無し				9
4	T2	磁器	小皿?	底部	製品・破片			0.35	10	内・外	見込み下位に一条線、腰、高台際に一条線			表3 No.27に再掲	9
5	T2	磁器	碗?	口縁~胴部	製品・破片			0.26	6	内・外	口縁~胴に波型文様、花菖蒲柄。見込み口縁部に文様。茶溜りに一条線	印判		明治~、表3 No.26に再掲	9

表3 出土遺物観察表 (陶磁器他)

No.	出土地点	層位	種別	器種	残存部位	法量 (cm)				重量	釉薬・絵付	主な文様・特徴		胎土色調	備考	写真図版
						口径	器高	底径	厚さ			外面	内面			
1	I区	砂層	陶器	甕	胴			1.45	125	内外面			やや密、にぶい橙		7	
2	I区	砂層	陶器	甕	口縁部			0.61	17	無			やや密	内外ロク口成形痕	7	
3	I区	砂層	陶器	鉢?	口~胴部			1.02	44	無					7	
4	I区	砂層	陶器	甕	胴			1.65	41	無			やや粗		7	
5	I区	砂層	陶器	甕	胴			1.06	63	無			やや密		7	
6	I区	砂層	陶器	皿?	底部		1.61	0.54	22	内面釉			やや粗、明赤褐色		7	
7	I区	砂層	陶器	小皿	口縁~底部		2.47	0.84	16	一			やや密	半製品	7	
8	I区	砂層	陶器	播鉢	腰~底部			1.15	136	内外面釉		筋目	やや密	外面ロク口成形痕	7	
9	I区	砂層	陶器	播鉢	胴部			0.93	56	内外面釉		筋目	密	外面ロク口成形痕	7	
10	I区	砂層	陶器	播鉢	胴部			0.95	32	内外面釉		筋目	密		7	
11	I区	砂層	陶器	播鉢	胴部			0.93	17	内外面釉		筋目	密、浅黄色		7	
12	I区	砂層	陶器	播鉢	胴部			0.97	8	内外面釉		筋目	密、灰色		7	
13	I区	砂層	陶器	播鉢	胴部			0.8	9	内外面釉			明赤褐色		7	
14	I区	砂層	陶器		口縁部			0.93	6	内外面釉			明赤褐色		7	
15	I区	砂層	陶器	碗	口縁部			0.84	12	内外面釉	黒褐色	赤褐色	密、灰色		7	
16	I区	砂層	陶器		口縁部			0.62	9	内外面釉		口縁~内側海鼠釉	密、灰色		7	
17	I区	砂層	陶器	甕	頸~肩			0.53	15	内外面釉			密	海鼠釉外面かけ流し	7	
18	I区	砂層	陶器	不明	胴			0.62	7	内外面釉			密、灰色		7	
19	I区	砂層	陶器	不明	頸~肩			0.79	6	内外面釉	19.20全	19.20全	密		7	
20	I区	砂層	陶器	不明	不明			0.79	6	内外面釉	19.20全	19.20全	密		7	
21	I区	砂層	陶器	不明	不明			0.5	5	内外面釉			密		7	
22	I区	砂層	陶器	不明	不明			0.56	5	内外面釉	海鼠釉		密		7	
23	I区	砂層	陶器	不明	不明			0.55	6	内外面釉	海鼠釉				7	
24	I区	砂層	陶器	不明	口縁~肩			0.59	2	内外面釉	海鼠釉	海鼠釉	にぶい橙7.5 YR7/3		7	
25	I区	砂層	陶器	不明	高台脇~底部(高台)			1.51	89	内外面釉	海鼠釉	海鼠釉	密	見込みにピン模様	7	
26	I区	砂層	磁器	茶碗	口縁			0.27	2	内外面釉	印判	印判		明治 印判	9	
27	I区	砂層	磁器	不明				0.28	1	内外面釉					9	
28	I区	砂層	窯道具	焼台				0.96	11					表4 窯道具に再掲		
29	I区	砂層	陶器	播鉢				1.04	28		ロク口成形痕	筋目		半製品	7	
30	I区	砂層	陶器	播鉢				1.09	18			筋目		半製品	7	
31	I区	砂層	陶器		口縁部			1.14	24				やや密	半製品	7	
32	I区	砂層	陶器	皿?	底部			0.91	12					半製品	7	
33	I区	砂層	陶器		底部			0.75	12				やや密	半製品、ロク口成形痕	7	
34	I区	砂層	陶器		底部			0.59	14				やや密	半製品、ロク口成形痕	7	
35	I区	砂層	陶器		底部			0.68	38					半製品	7	
36	I区	砂層	陶器	甕?				0.36	44					半製品、ロク口成形痕	7	
37	I区	砂層	陶器					0.84	12					半製品	7	
38	I区	砂層	陶器					0.79	15				やや密	半製品、ロク口成形痕	7	
39	I区	砂層	陶器					0.93	18				やや密	半製品、ロク口成形痕	7	

No.	出土地点	層位	種別	器種	残存部位	法量 (cm)				重量	釉葉・絵付	主な文様・特徴		胎土色調	備考	写真図版
						口径	器高	底径	厚さ			外面	内面			
40	I区	砂層	陶器					1.09	17				やや密	半製品、ロク口成形痕	7	
41	I区	砂層	陶器	甕?	胴部?			2.11	140					半製品、破片		
42	I区	砂層	陶器	甕?	胴部?			1.67	46					半製品、破片		
43	I区	砂層	陶器					1.65	25			成形痕	やや粗	半製品、破片	7	
44	I区	砂層	陶器					1.44	52		内外両面暗灰色		やや密		7	
45	I区	砂層	陶器					1.04	7				やや粗	半製品、破片	7	
46	I区	砂層	陶器					1.01	6				やや粗	半製品、破片	7	
47	I区	砂層	陶器	鉢?				0.48	6		ロク口成形痕	ロク口成形痕	やや粗	半製品、破片	7	
48	I区	砂層	陶器					0.59	3			ロク口成形痕		半製品、破片	7	
49	I区	砂層	陶器					0.81	5			ロク口成形痕		半製品、破片	7	
50	I区	砂層	窯道具?					1.34	19	外面釉			赤みが強い	胎土が荒い表4窯道具に再掲	11	
51	I区	砂層	陶器	碗?				0.52	3		ロク口成形痕			半製品、破片	7	
52	I区	砂層	陶器	碗?				0.76	4		ロク口成形痕	ロク口成形痕		半製品、破片	7	
53	I区	砂層	陶器	壺?	頸部			0.57	4		ロク口成形痕	ロク口成形痕		半製品、破片	7	
54	I区	砂層	窯道具?						11				赤みが強い	表4窯道具に再掲	11	
55	I区	砂層	窯道具?						28				赤みが強い	表4窯道具に再掲	11	
56	I区	砂層	磁器	皿	見込み			0.76	7	手描き文様			薄い鼠色	製品、破片		
57	I区	砂層	陶器	皿		7.96	2.35	5.3	76				やや粗	製品、完形	7	
58	I区	砂層	ガラス	ビン?					8					陶器と共伴出土	10	
59	I区	砂層	ガラス						9					陶器と共伴出土	10	
60	I区	砂層	窯道具?				1.68	1.49	59					表4窯道具に再掲	11	
61	I区	砂層	窯道具?					2.28	54					表4窯道具に再掲	11	
62	I区	砂層	窯道具?						46					表4窯道具に再掲	11	
63	I区	砂層	窯道具?						7					表4窯道具に再掲	11	
64	I区	砂層	陶器	甕?				1.13	33	内外釉				半製品?	8	
65	I区	砂層	陶器	甕	胴部?			1.66	116				やや密	半製品、ロク口成形痕	8	
66	I区	砂層	陶器					0.71	4	内外釉					8	
67	I区	砂層	陶器					0.56	3			釉無し			8	
68	I区	砂層	陶器					0.59	5					半製品(素焼き)	8	
69	I区	砂層	陶器	甕	胴部			2.39	199				やや密	半製品、ロク口成形痕	8	
70	I区	砂層	陶器	甕	胴部～腰			1.29	91				やや密	半製品、ロク口成形痕	8	
71	I区	砂層	陶器	甕?	胴部			2	151				やや粗	半製品、ロク口成形痕	8	
72	I区	砂層	陶器	甕	口縁	口縁幅2.26		2.1	100				やや密		8	
73	I区	砂層	陶器		胴部			1.11	17	内外釉			密		7	
74	I区	砂層	陶器	鉢	高台脇～高台			0.84	77	内外釉			密	ロク口成形痕、みこみに目癒着	7	
75	I区	砂層	陶器	鉢	高台脇～高台			1.01	46	内外釉	海鼠釉	海鼠釉	密、灰色		7	
76	I区	砂層	陶器		頸部～肩			0.61	15	内外釉	海鼠釉		密		7	
77	I区	砂層	陶器					0.89	29	内外釉			密		7	
78	I区	砂層	陶器					0.61	12	内外釉	海鼠釉		密		7	
79	I区	砂層	窯道具						47		釉				11	
80	I区	砂層	陶器	搦鉢	胴部			0.87	20			筋目	密、灰色	外面ロク口成形痕	7	
81	I区	砂層	陶器	搦鉢	胴部			0.98	17			筋目	密	外面ロク口成形痕	7	
82	I区	砂層	陶器	搦鉢	胴部			1.01	9			筋目	密、灰色	外面ロク口成形痕	7	
83	I区	砂層	陶器	搦鉢	胴部			0.9	11			筋目	密、灰色	接合	7	
84	I区	砂層	磁器	碗				0.33	3	印判	印判	印判			9	

No.	出土地点	層位	種別	器種	残存部位	法量 (cm)				重量	釉薬・絵付	主な文様・特徴		胎土色調	備考	写真図版
						口径	器高	底径	厚さ			外面	内面			
85	I区	砂層	磁器	皿?				0.65	3	印判	印判				9	
86	I区	砂層	磁器					0.34	3						9	
87	I区	砂層	陶器	瓦				2.02	125						7	
88	I区	砂層	陶器	碗	口縁			口縁幅 0.78	0.68	12		釉	釉	やや密	No89と同じ釉	7
89	I区	砂層	陶器		口縁			口縁幅 0.88	0.66	18		釉	釉	やや密	No 101と接合	7
90	I区	砂層	陶器		肩~胴部				0.49	13		内外同じ釉			7	
91	I区	砂層	陶器	甕?	胴部?				1.2	30		海鼠釉	釉	密、灰色		
92	I区	砂層	陶器	甕?	胴部?				0.89	14		内外同じ釉		密、灰白色	製品	
93	I区	砂層	陶器		頸部~肩				0.48	6	口縁から かけ流し	海鼠釉	鉄釉?		製品	
94	I区	砂層	磁器	皿	口縁			口縁幅 0.3	0.45	15					明治以降	9
95	I区	砂層	磁器	皿	口縁			口縁幅 0.46	0.33	7	印判				明治以降 3個体接合	9
96	I区	砂層	陶器	甕	口縁			口縁幅 3.44	縁高さ 1.68	1.22	117		口縁の縁が外側 に折り込み。	やや密、 明黄褐色	半製品、ロ ク口成形痕	
97	I区	砂層	陶器	甕	底部				6.5	276					桔梗台に付 着	12
98	I区	砂層	陶器	播鉢						178			筋目	密	播鉢と他の 容器が付着	8
99	I区	砂層	陶器	鉢?	高台脇~高台				0.9	29		海鼠釉		密		
100	I区	砂層	陶器	甕	口縁			口縁幅 1.02	0.58	16				密、灰色	99と同じ 釉、口縁内 側頸部	
101	I区	砂層	陶器		口縁			口縁幅 0.88	0.67	13		釉	釉		89と接合	
102	I区	砂層	陶器	甕	口縁			口縁幅 1.39	0.59	33		釉	釉	密、灰色	口縁外側に 折れ	
103	I区	砂層	陶器	甕					1.23	13	内外釉			密、灰色	ロク口成形痕	
104	I区	砂層	陶器	甕					1.23	38	内外釉			密、灰色	ロク口成形痕	8
105	I区	砂層	陶器						0.62	6	内外釉			密、灰色	ロク口成形痕	8
106	I区	砂層	陶器	甕	肩~胴				0.63	5	内外釉			密、灰色		8
107	I区	砂層	陶器		胴				0.78	12				密	108と同じ釉	8
108	I区	砂層	陶器						0.59	7	内外釉				107と同じ釉	8
109	I区	砂層	陶器	甕?					1.57	33			輪積痕			8
110	I区	砂層	陶器	甕	底部				3.33	1.12	26			普通		8
111	I区	砂層	陶器	播鉢	腰~底部				1.33	78	内外釉		筋目	普通		8
112	I区	砂層	陶器	甕	口縁			口縁 2.84	1.43	124				やや粗、 にぶい橙 色		8
113	I区	砂層	窯道具						2.71	211					表4 窯道具 に再掲	11
114	I区	砂層	窯道具	サヤ					1.89	109					表4 窯道具 に再掲	11
115	I区	砂層	陶器	甕	胴				1.66	76					半製品	8
116	I区	砂層	陶器	甕	胴				1.22	42				やや粗	半製品	8
117	I区	砂層	陶器	播鉢					1.22	24				やや粗	半製品	8
118	I区	砂層	陶器	播鉢	底部				1.19	21	内面釉		筋目	やや粗	底部回転糸 切痕	8
119	I区	砂層	窯道具						2.08	86					表4 窯道具 に再掲	11
120	I区	砂層	窯道具						3.03	215					表4 窯道具 に再掲	11
121	I区	砂層	陶器						1.54	85			ロク口 成形痕	やや密		8
122	II区	砂層	陶器	甕?	胴				1.8	92			ロク口 成形痕	やや密		8
123	I区	砂層	陶器		胴				0.91	20				灰白色	半製品	8
124	I区	砂層	陶器		胴				1.14	23					半製品	8
125	I区	砂層	陶器		胴				1.02	22				浅黄橙色	半製品	8
126	I区	砂層	陶器		胴				0.82	11					半製品	8
127	I区	砂層	陶器		胴				0.68	8					半製品	8
128	I区	砂層	陶器	窯道具?					1.71	9					表4 窯道具 に再掲	11
129	I区	砂層	陶器						0.83	5				やや密	半製品	8
130	I区	砂層	陶器	甕?	頸~肩				0.92	28				やや粗	半製品	8
131	I区	砂層	陶器	甕?	胴				1.31	50				やや密	半製品	8
132	I区	砂層	陶器	皿	見込み				1.11	46				やや密	半製品	8
133	I区	砂層	陶器	甕	底部				1.53	86				やや密	半製品	8
134	I区	砂層	磁器	皿	口縁~胴				0.37	22		植物	植物		製品、輪花 皿	9
135	I区	砂層	陶器	急須						10				密		
136	II区	北側壁	陶器	甕?	口縁					24				やや粗、 浅黄橙色	半製品	



表4 窯道具観察表

No	出土地点	名称	法量 (cm)				重量 (g)	状態		特徴	備考	写真図版
			長さ	高さ	幅	厚さ		完形	破片			
1	I区	初ダング	5.39		2.23	18.8	18	○				11
2	I区	初ダング	4.14		2.28	1.64	20		○			11
3	I区	初ダング	2.98		2.35	1.45	13		○			11
4	I区	初ダング	6.02		1.87	1.86	21		○	全面に初痕跡が明瞭に遺る。		11
5	I区	初ダング	5.62		1.79	1.85	18	○		全面に初痕跡が明瞭に遺る。		11
6	I区	初ダング	5.22		3.01	1.52	23		○	全面に初痕跡が明瞭に遺る。		11
7	I区	初ダング	6.41		2	1.49	27		○			11
8	I区	初ダング	4.24		2.13	15.1	16		○			11
9	I区	初ダング	4.74		2.26	2.14	28		○			11
10	I区	初ダング	9.05		3.1	2.05	54	○		スプーン状		11
11	I区	桔梗台		2.57		0.68	22.9		○	台上面に糸切り痕、脚1。		11
12	I区	桔梗台		1.95		1.05	11.1		○	台上面に糸切り痕、脚1。		11
13	I区	桔梗台		3.42		1.07	78.2		○	台上面に糸切り痕、脚1。		11
14	I区	桔梗台		1.62		1.02	40.5		○	台上面に糸切り痕、内側整形痕、脚2。		11
15	I区	桔梗台		2.57		0.78	35.5		○	台上面に糸切り痕、内側整形痕、脚1。		11
16	I区	桔梗台		2.93		1.09	26.6		○	台上面に糸切り痕、内側整形痕、脚1。		11
17	I区	桔梗台		2.18		0.49	37.2		○	台上面に糸切り痕?、内側整形痕、脚2。		11
18	I区	桔梗台		2.35		1.04	81.5		○	台上面に糸切り痕、内側整形痕、脚2。		11
19	I区	桔梗台		4.24		1.52	119		○	台上面に糸切り痕、中央に円形孔。側面内部成型痕。脚2。		11
20	I区	桔梗台		3.92		0.96	63		○	台上面に糸切り痕、中央に円形孔、側面内側整形痕。脚1。		11
21	I区	桔梗台		4.66		1.08	136		○	台上面に糸切り痕。側面内側整形痕。脚欠損。		11
22	I区	桔梗台		5.13		1.5	138		○	台上面に成型痕。側面内側成型痕。		11
23	I区	桔梗台					276		○	台上面に甕の底部付着する。脚欠損五脚と推定	No.97 (甕底部)	12
24	I区	円筒状焼台		8.09		1.46	205		○	内外側面成型痕。底部回転糸切痕跡。		
25	I区	柱状焼台		9.28		6.77	323		○	3面調整痕。角が円く隅丸状。		
26	I区	焼台?	11.58	4.16	9.47	2.21	247		○	脚1。釉が一面に確認。	25、26、27、28 同一個体か	
27	I区	焼台?				2.14	83		○	2面に側面痕跡、釉が一面に確認。		
28	I区	焼台?	9.21		7.27	2.19	138		○	釉を一面に確認。		
29	I区	焼台?	7.56		5.7	2.23	99		○	釉を一面に確認、側面あり。		
30	I区	焼台?	10.22	2.55		1.92	221		○	側面は弧。成型の痕跡あり。		
31	I区	焼台?				4.21	160		○	側面に輪積痕。粘土紐の調整痕あり。		
32	I区	焼台?					25		○	粘土塊。No.31と色調が同一。破損品か?		
33	I区	焼台?				0.96	11		○	成型痕。	(表3No.28)	
34	I区	窯道具?				1.34	19		○	外面釉、赤みが強い。	胎土が荒い/(表3No.50)	11
35	I区	窯道具?					11		○	赤みが強い。	胎土が荒い、50より焼が甘い/(表3No.54)	11
36	I区	窯道具?					28		○	赤みが強い。	胎土が荒い、51より焼が甘い/(表3No.55)	11
37	I区	窯道具?		1.68		1.49	59		○		(表3No.60)	11
38	I区	窯道具?				2.28	54		○		(表3No.61)	11
39	I区	窯道具?					46		○		(表3No.62)	11
40	I区	窯道具?					7		○		(表3No.63)	11
41	I区	窯道具?					47		○	外面に釉、内面破損面。形状は円柱状。	(表3No.79)	11
42	I区	窯道具				2.71	211		○		(表3No.113)	11
43	I区	サヤ				1.89	109		○		(表3No.114)	11
44	I区	窯道具				2.08	86		○		(表3No.119)	11
45	I区	窯道具				3.03	215		○		(表3No.120)	11
46	I区	窯道具				1.71	9		○		(表3No.128)	11

写真図版1 工事立会トレンチ2 (T2)



写真1 T2 アスファルト除去



写真2 T2 断面 溝埋め土



写真3 T2 平面 溝検出





写真4 I区アスファルト除去作業



写真5 I区調査状況



写真6 I区トレンチ2 (T2) と拡張の状況



写真7 桔梗台出土状況



写真8 陶器出土状況



写真9 桔梗台他出土状況





写真10 I区西側 断面(東→西)



写真11 I区北側断面(南→北)  
(砂利層はトレンチ2(T2)の痕跡)



写真12 北側断面I区(南→北)



写真13 北側断面(南→北)  
(右端 排水管理設箇所)



写真14 I区断面部分(北→南)  
(左端砂利層トレンチ2(T2)跡)

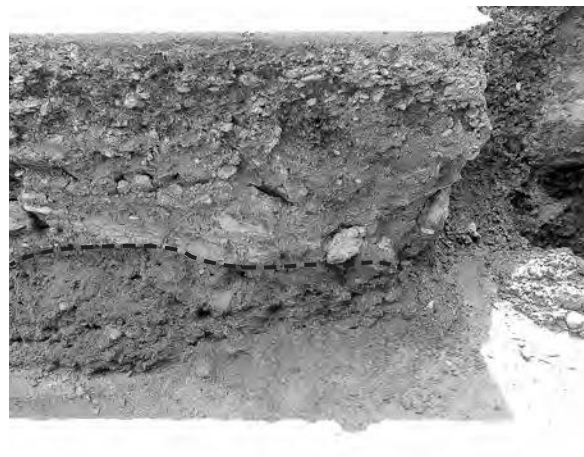


写真15 I区南側断面部分(北→南)  
(破線から下位の砂質層から遺物出土)



写真図版5 完掘状況 (2)



写真16 I区完掘状況 (東→西)



写真17 I区完掘状況 (西→東)





写真18 II区調査状況 (西→東)



写真19 II区調査状況



写真20 II区北側壁面 (南→北)



写真21 II区北側壁面 (南→北)



写真22 II区北側壁面 (南→北)



写真23 II区完掘状況 (西→東)

写真図版7 出土遺物(1) 陶器

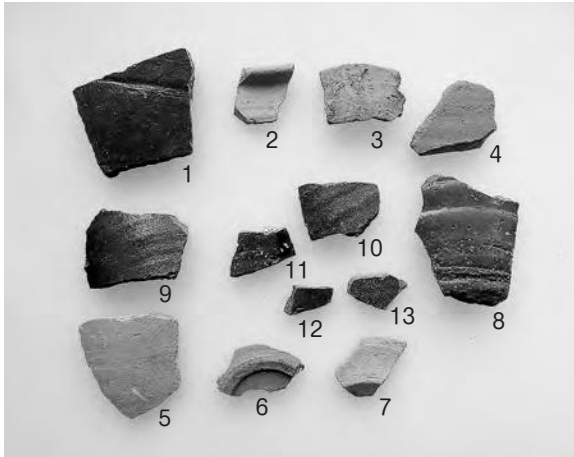


写真1 陶器片外面

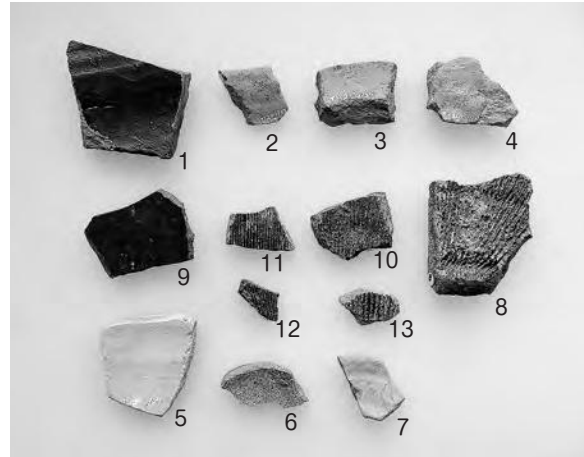


写真1-2 (写真1の内面)

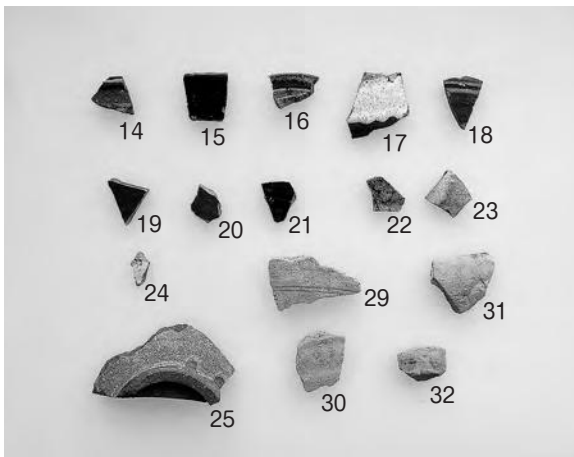


写真2 陶器片

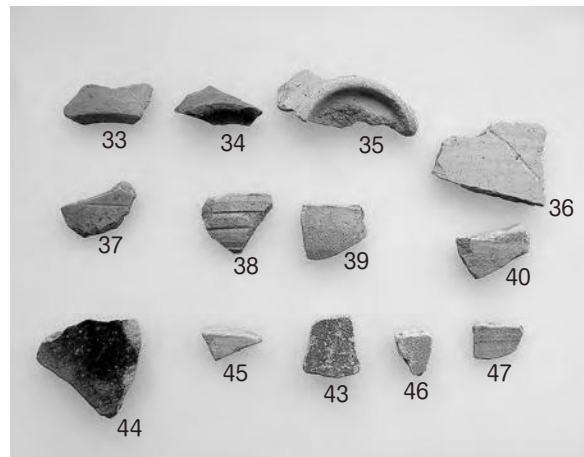


写真3 陶器片

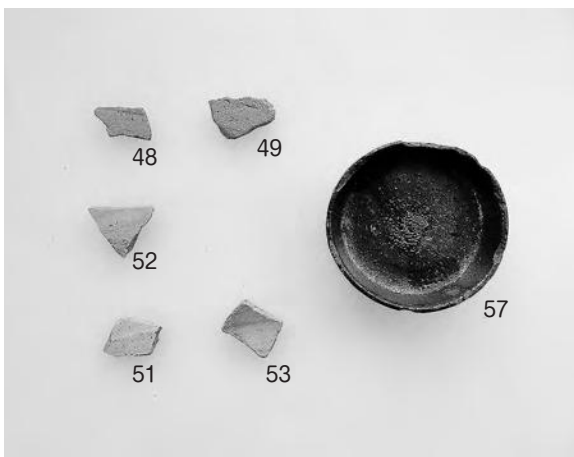


写真4 陶器片、小皿

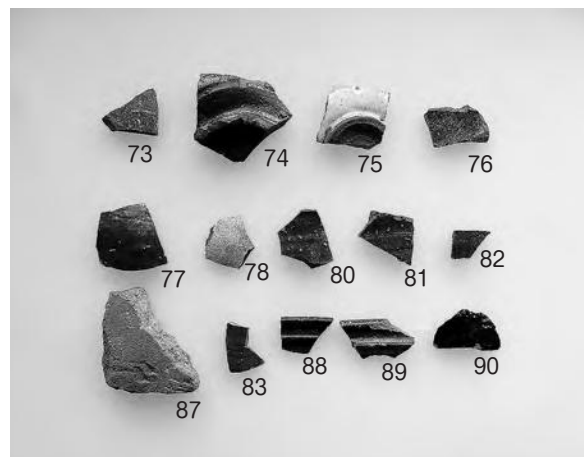


写真5 陶器片、瓦片(表3No.87)

写真図版8 出土遺物(2) 陶器

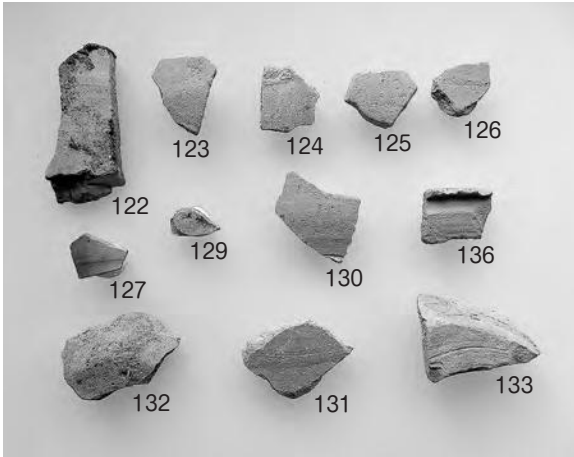


写真6 陶器片

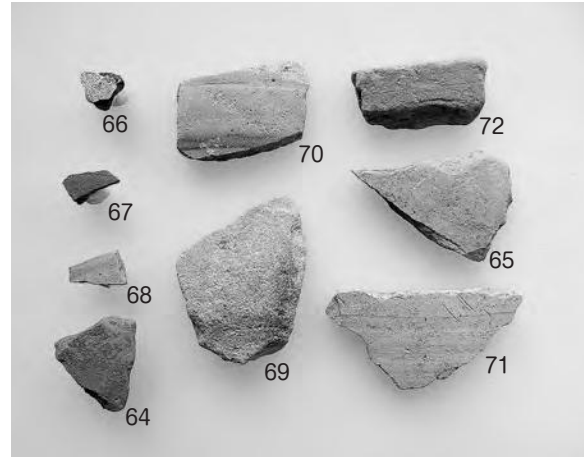


写真7 陶器片

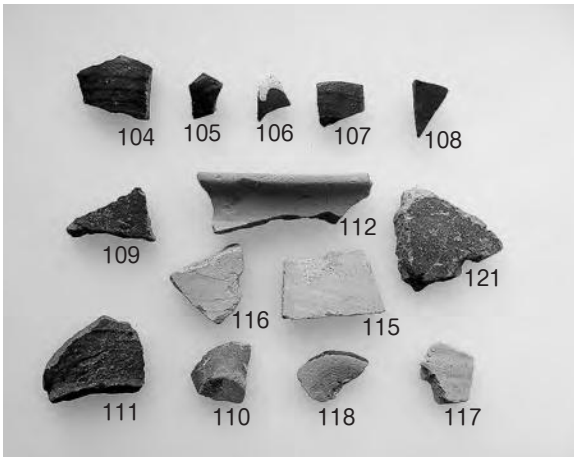


写真8 陶器片外面

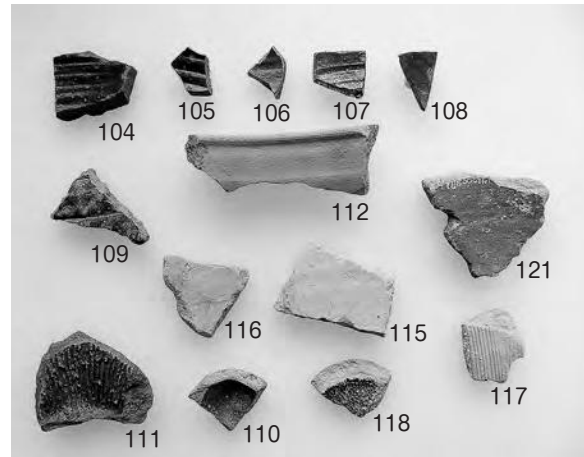


写真9 陶器片(写真8の内面)

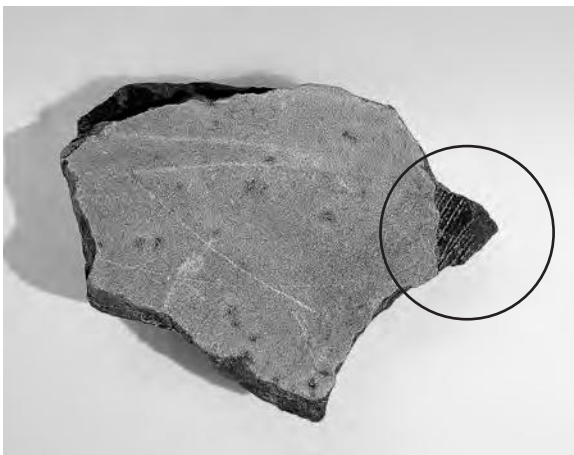


写真10 陶器片付着内面(表3No.98)  
(播鉢片・鉢片)



写真11 陶器片付着外面(表3No.98)



写真図版9 出土遺物（3）磁器

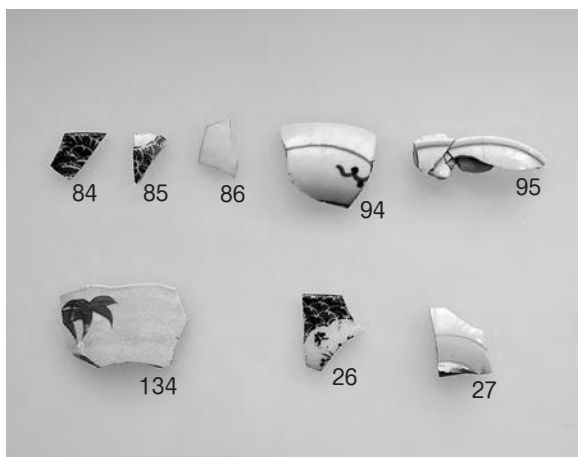


写真12 磁器片外面

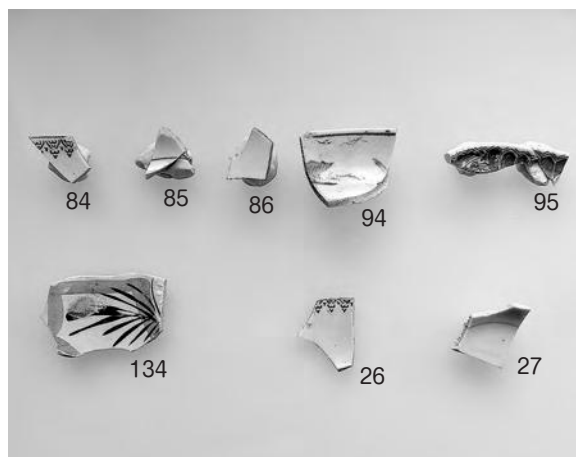


写真13 磁器片（写真12の内面）

工事立会出土遺物（陶磁器）

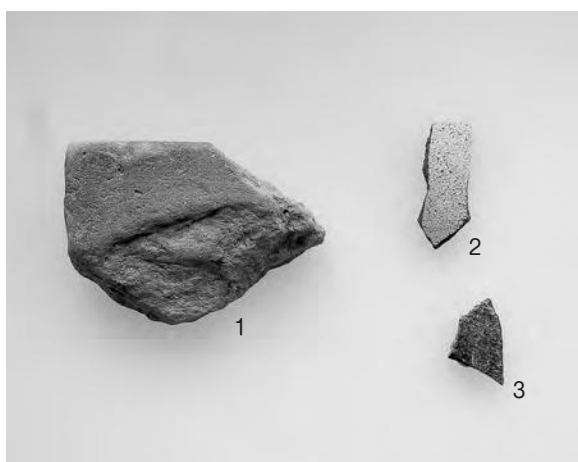


写真14 陶器片外面



写真15 陶器片（写真14の内面）

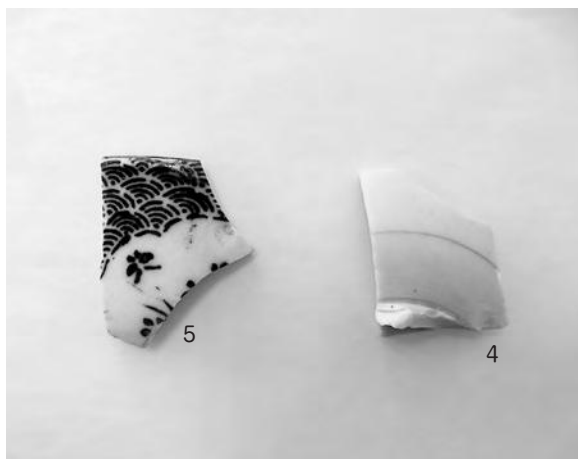


写真16 磁器片外面

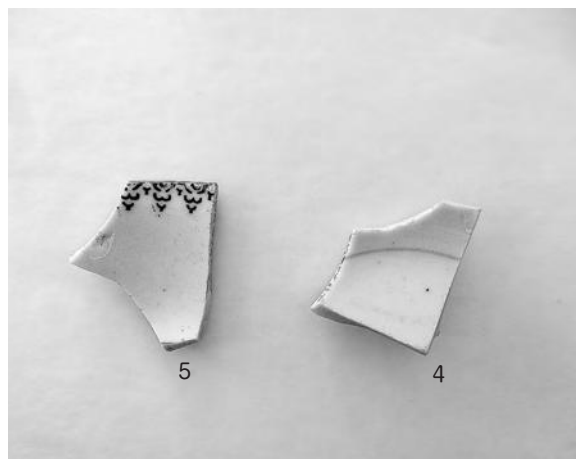


写真17 磁器片（写真16の内面）



写真18 木炭片

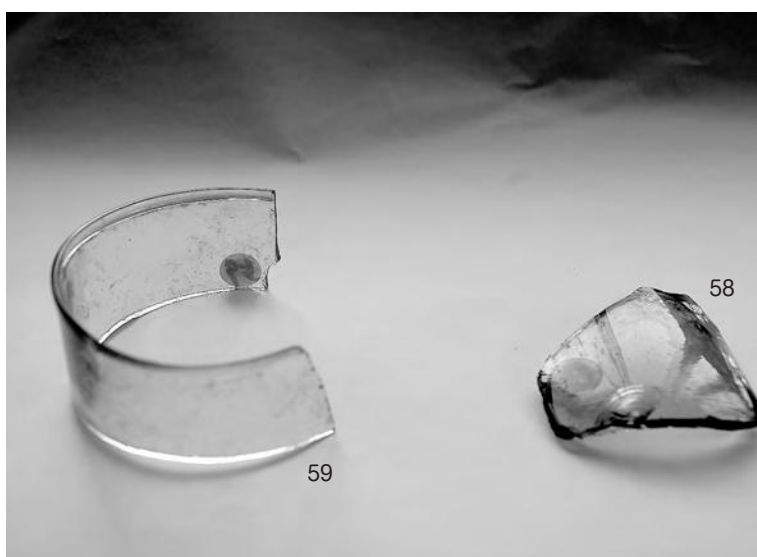


写真19 ガラス片 ビン破片

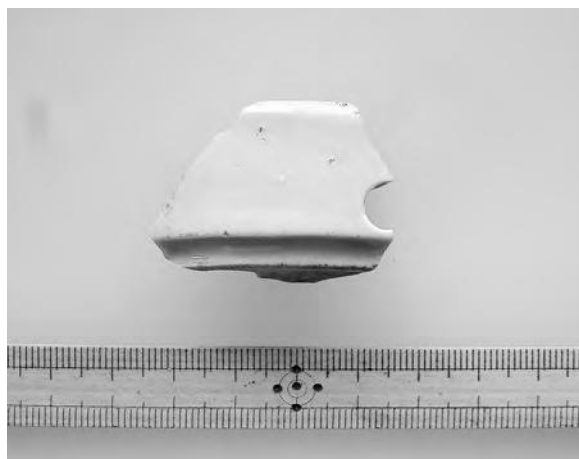


写真20 ガイシ片



写真21 珪化木片

写真図版11 出土遺物 窯道具（粉ダンゴ・桔梗台他）

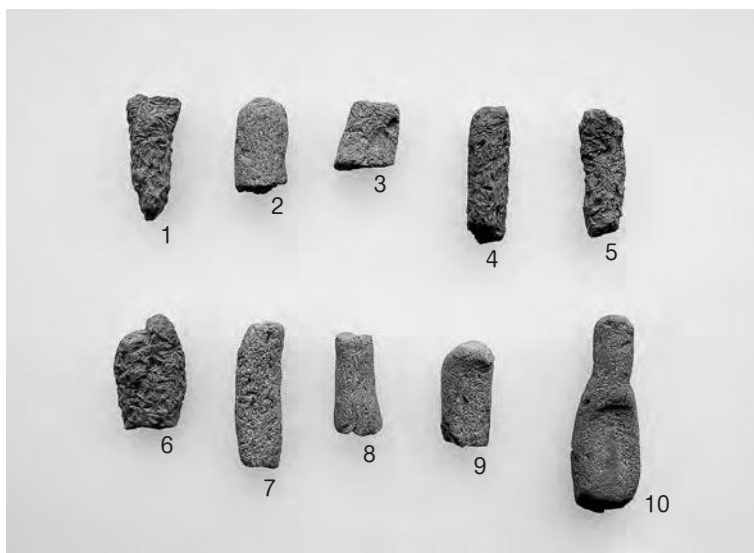


写真1 粉ダンゴ（1～9）・スプーン状焼台（10）

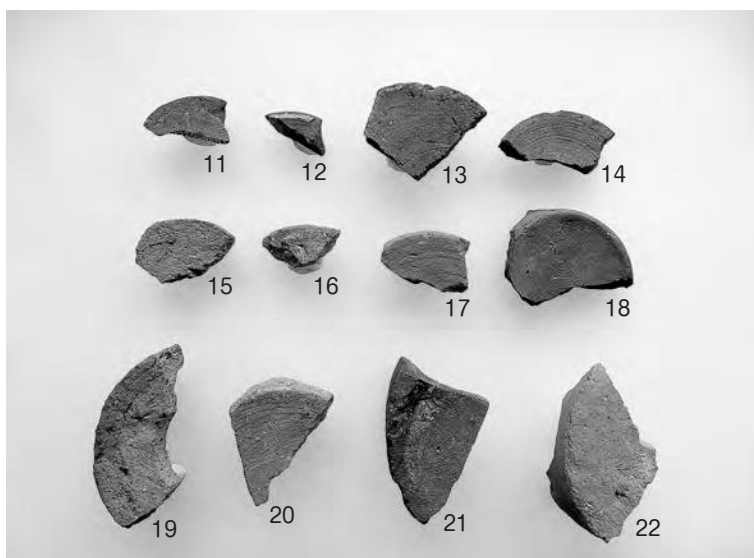


写真2 桔梗台破片

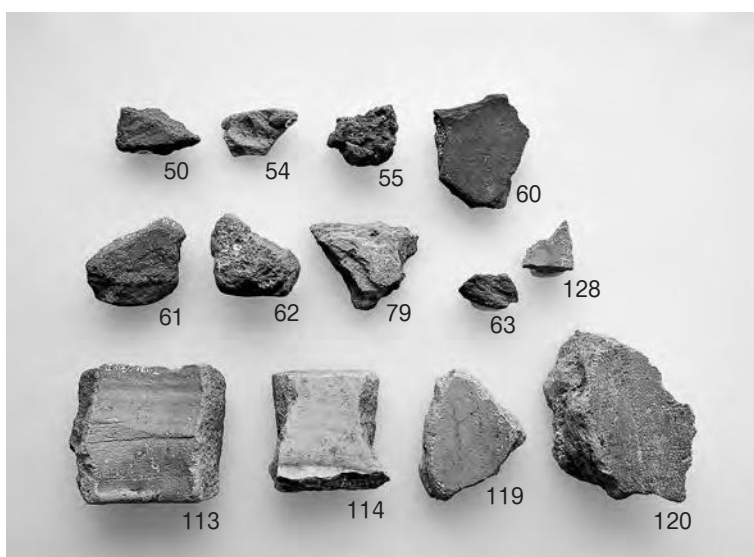


写真3 サヤ他焼台内側





写真4 上面（陶器内面）



写真5 桔梗台底部



写真6 側面

## Ⅲ 赤萩焼について

月町遺跡の西側に東北自動車道を挟んで所在する赤萩焼遺跡は、埋蔵文化財包蔵地として登録されている。(図2、表1)古くから知られている窯跡であるが、赤萩焼について調査研究報告した事例は少ない。

今回の発掘調査で出土した遺物には、窯道具、陶器類が多数を占めていることから、近傍の窯業地である赤萩焼に関わる遺物の流出品と推測している。

本稿では、以上のことを踏まえつつこれまでの研究報告を概観しながら赤萩焼の概要を紹介し、今後の研究に繋げようとするものである。先行研究である阿部和夫1992・1998によるところが大きい。

### 1 赤萩焼（宮田焼）の創業

阿部和夫1992「赤萩焼に関する資料」によれば、萩荘喜代治「赤萩焼晩年譜（昭和四九年九月）」により紹介している。

- ・文化8年（1813）赤萩村阿部幸右衛門良憲が、京都より技術者及川吉三郎を招く。
- ・幸右衛門次男助志知（幼名民平）を及川吉三郎の弟子として、技術の習得にあたらせた。

これが始まりである。赤萩焼は、阿部家の屋敷名をとって宮田焼ともいう。後世の文献では赤萩焼の名称が多く使われている。製品の卸しや販売の資料が遺っていないか大変興味のあるところである。

以降昭和時代まで、助志治、喜代平、碩治郎と窯業が続けられた。碩治郎の孫知稼夫は、会津工業学校窯業科を大正14年（1925）に卒業している。

### 2 窯について

窯の形態は、一室窯や登り窯である。現在萩荘家屋敷内には、窯跡をはっきりとみる事は出来ない。稼働した窯の名称を拾い上げると①幸右衛門窯、②佐一郎窯、③碩治郎窯がある。

#### (1) 幸右衛門窯

文化8年（1813）に築造されている。一室窯である。ダルマ窯または平窯で、広さ4畳、高さ約6尺。焚口は東西2か所。製品取り出し口は、東西2か所、高さ約1間、幅2尺である。終戦後（農地改革直前）取り壊されている。

#### (2) 佐一郎窯

阿部佐一郎良顕が築造した。年月日不詳。大きさは、縦8間、幅2間5分の20坪、7室である。陶器製造工場は縦6間、横9間の13坪5歩である。休業の間もあったようであるが、明治30年代佐一郎の孫碩次郎がこの窯を使用している。同窯は明治40年代の初め台風によって破壊され、工場と職人長屋は、大正初期、碩次郎によって取り払われた。

#### (3) 碩次郎窯

碩次郎によって、大正10年代の初め宮田館屋敷内に築いた。一室窯である。栃木県塩原出身の瓦職人瀬尾鶴吉を雇って瓦を焼いている。その後人を雇い入れ素焼きの陶器を焼いたが、昭和4、5年（1929、1930）頃廃窯となり陶器の製造工場も取り払われ、昭和10年代の末期に自然破壊した。

### 3 生産された製品

赤萩焼は、地元の原料を使用し、地元の人を雇い、地元で販売した。その製品は次のようなものである。

幸右衛門窯では、大小の瓶、播鉢、大小の鉢、徳利などの日用品であるという。佐一郎窯では、従来の日用品の他大形の水ガメ、また、赤レンガも焼いている。碩次郎窯では花瓶、水カメ、練り鉢、どぶろく用長壺、摺鉢、火消し壺、茶飲み茶碗、羽口、七輪、胞甕、黒レンガ、赤レンガ、土管である。

現在、製造販売された製品の多くは、近郷近在の諸家に遺ると見られる。その実態は把握されていない。製品は日用品であり破損し使用に耐えがなくなり、代替品に買い替えが進めば廃棄される運命にある事は想像に難くない。郷土の地場産業の一つとして、窯業関係資料は保存についてのなんらかの手立てを考える時期に来ている。

(畠山)

写真図版1 荻荘家に伝わる赤荻焼関係資料

1 登り窯跡から発見された陶器片、窯道具



写真1 陶器片



写真2 陶器片



写真3 搦鉢片（粉ダンゴ付着）

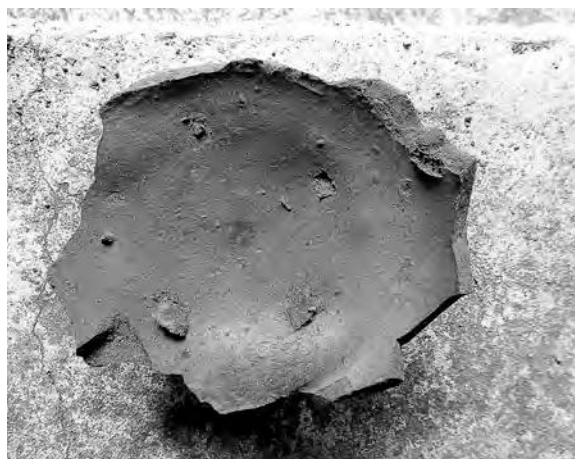


写真4 目跡の痕跡が確認できる甕  
（写真6の平面）



写真5 搦鉢片（粉ダンゴ付着）



写真6 桔梗台と付着した甕底部  
（写真4の側面）



2 製品・半製品の一部分



写真7 半製品壺ほか



写真8 半製品鉢ほか



写真9 甕類



写真10 甕類

## IV 資料

### 1 一関市、平泉町の近世～近代窯業

一関市及び西磐井郡平泉町の、近世から近代にかけての窯業の足跡を概観すると次のとおりである。個々の窯の実態は不明な点が多い。長島焼は、研究が進められ注目を浴び名前も広く知られている。多くの窯跡は今後の調査研究の余地が多分に大きい。赤萩焼以外の窯跡について紹介する。文献による名称を優先した。(表5)

- 1 金山窯 一関市山目泥田山下  
鈴木伊勢之助操業、大正7年創業中止。萩荘碩次郎の弟子。
- 2 卯ノ木窯 花泉町油島字下原田  
焙烙を製作し販売したと伝える。基盤整備により失われて現在はない。屋号は「ハウロクヤ」と伝える佐藤家がある。(山川純一氏ご教示) 名称は元の字名とした。
- 3 沼崎焼 花泉町  
詳細不明。『いわての手仕事』の図に掲載。
- 4 花泉焼 花泉町花泉  
明治35年(1902)、福島県会津若松の千葉貞次が短期間日用の祖陶器を製造と伝える。
- 5 枅畑焼(曾慶焼、松畑焼) 大東町曾慶字袖振  
安政3年(1856)頃の創業。創業者は喜惣太。深助、良平と3代続き明治20年代に廃業と伝える。地元で製品が遺る。
- 6 大浜瓦場民窯 千厩町小梨字大浜  
創業年創業者は不明、明治期と推定される。地元で製品が遺る。窯跡はカワラバの屋号地名が遺る。埋蔵文化財包蔵地大浜瓦場民窯遺跡として登録されている。
- 7 和ノ洞窯 千厩町奥玉字船丸・天ヶ森  
創業者操業年不明。「福島から来た人が焼き物をしていた。」とも伝わる。現地近傍に製品がのこる。窯跡とみられる場所があり、甕、鉢類の製品が遺る。陶土は地元の土と見られる。焼き物に関わった人の墓があり祀られている。同地の宍戸家の先祖が世話をしたと伝わる。
- 8 瓦工場 千厩町奥玉字船丸  
原料の土は地元で瓦を生産した。地元の小野寺氏が経営という。詳細不明で、一帯は昭和34年(1959)頃開田により農地となる。
- 9 折壁焼 室根町折壁  
小山文三郎(1816～1895)が始めた。文三郎は、渋民村芦章右衛門の三男で下折壁村小山家に入婿。京都の楽吉の門に入り技を磨いたと伝わる。製品は伝世し芦東山記念館に一部収蔵されている。
- 10 胤和焼(仮称) 藤沢町藤沢  
千葉胤和が創始。折壁焼の陶系を引くと伝わる。地元の土を使い瓦工場も操業した。詳細不詳。藤沢町教育委員会1985『藤沢の余光』に楽焼製品写真が掲載されている。名称は、創業者の名とした。
- 11 百目木焼 藤沢町藤沢字荒屋敷  
畠山家(屋号百目木)に製品が伝わる。窯の実態は不明。百目木焼の名称は『藤沢の余光』編集

の際の町文化財調査委員藤本直、山田秀実両氏の調査による。

12 長島焼 西磐井郡平泉町長島字下田

地元では、下田焼という。地元の通称「瀬戸屋」吉家家の先祖が嘉永5年（1851）創業。明治3年（1870）までの営業の記録資料が遺る。製品は、甕類、摺鉢、井類、花筒、香炉、七輪、火消し甕、茶甕、火取り、水差し、五徳、灰入、植木鉢、大小の皿、火鉢で日用雑器を製作し、東磐井・西磐井、水沢、岩谷堂、黒沢尻方面に販売した。

13 毛越寺焼 西磐井郡平泉町平泉字志羅山

赤萩焼の碩次郎（1872～1945）のもとで修業した高橋久兵衛が創業した（大正初期か？）。場所は、毛越寺山門前の観自在王院跡の一角である。窯道具等が確認されている。製品、販路操業期間など不明である。かめこ屋と呼ばれた。

## 2 仙臺鑛物調

「御分領中御金山附拾五品物運上並請負人面附年限控帳」 宮城縣史復刻版32（資料篇9）（抄）  
「瀬戸土取場」の記載のある箇所について拾い出した。

岩井郡之内西磐井二拾四ヶ村 (略)	赤萩村之内 百姓卯太郎地付山 一瀬戸土取場 請負人 助志治 六右衛門
東山四拾六ヶ村 (略)	但慶応元年丑年より巳の年まで末五ヶ年御下知済 運上金五分也 請負人 久米之助
小島村 笹地と申所 一瀬戸土取場 請負人 武七	曾慶村馬場と申所 (略)
但慶応元年丑年より巳の年まで末五ヶ年御下知済 運上代八百文 御下知済 (以下略)	請負人 孫治 請負人 勇治

(畠山)

表5 一関市・平泉町窯業一覧

番号	名 称	所在地	主な製品	内容・創業者期間等	主な文献等	備考
1	金山焼	山目泥田山下		鈴木伊勢之助 大正7年(1918)中止	『赤萩焼の研究』	
2	卯ノ木窯	花泉町油島	焙烙	地元佐藤家屋号ホウロクヤ	聞き取り、山川純一氏教示。	
3	沼崎焼	花泉町	不明	不明	『いわての手仕事』	
4	花泉焼	花泉町花泉		千葉貞次、日用粗陶器、明治	『岩手の陶用』	
5	枅畑焼(曾慶焼、松畑焼)	大東町曾慶	甕、ねり鉢、徳利、皿、火鉢、播鉢等、	喜惣太。安政～明治20年頃	『東磐史学』第31号聞き取り	写真8、9、10
6	大浜瓦場民窯	千厩町小梨	甕、他	不明(明治か)	『東磐史学』第31号	
7	和ノ洞窯	千厩町奥玉	甕、鉢	不明(明治か)	『東磐史学』第31号	写真2・3、4・5
8	瓦工場	千厩町奥玉	瓦	小野寺氏、昭和20年代(?)	聞き取り	
9	折壁焼	室根町折壁	楽焼	小山文三郎	『東磐史学』第26号	写真6・7
10	胤和焼	藤沢町藤沢	楽焼	千葉胤和	『東磐史学』第26号	
11	百目木焼	藤沢町藤沢	皿	不明	『岩手の陶窯』	写真1
12	長島焼(下田焼)	平泉町長島	甕、播鉢、井類他	嘉永五年	『赤萩焼の研究』 『岩手の陶窯』	写真11
13	毛越寺焼	平泉町平泉	不明	大正期か(?)	『赤萩焼の研究』	写真12



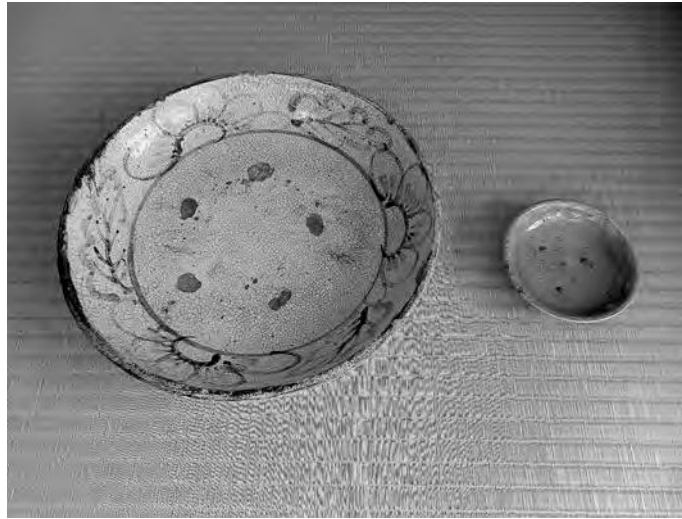


写真1 百目木焼 藤沢町藤沢 個人蔵



写真2・3 和ノ洞窯 千厩町奥玉 個人蔵



写真4・5 和ノ洞窯 千厩町奥玉 個人蔵



写真6・7 折壁焼（楽焼）茶碗、急須、菓子皿（芦東山記念館収蔵）



写真8 杣畑焼 甕・壺 個人蔵



写真9 杣畑焼 甕 個人蔵



写真10 杣畑焼 甕破片（曾慶市民センター収蔵）



写真11 長島焼甕 個人蔵

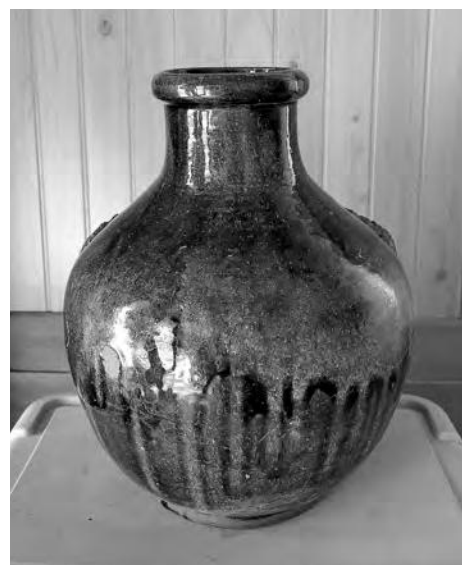


写真12 毛越寺焼 個人蔵

# 抄 録

ふりがな	つきまちいせきはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	月町遺跡発掘調査報告書							
副書名	磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	菅原孝明・畠山篤雄・光井文行・阿部充							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL0191-26-0820							
発行年月日	2021年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つきまち 月町	いちのせきしあこおぎあざつきまち 一関市赤荻字月町 ちさき 63-3地先	03209	NE95- 0387	38° 56' 30"	141° 6' 12"	20200907 ～ 20200917	14m <sup>2</sup>	下水道 工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
月町	散布地	平安、近世、 近代		土師器 陶磁器 窯道具				
要約	月町遺跡は、平安時代の散布地として把握していたが、今回の調査の結果、江戸時代後期から明治時代にかけてと推定される遺物を多数確認した。これらは、近傍に窯が所在(赤荻焼遺跡)しており、その廃棄物等が流出して堆積したものと考えられる。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集

## 月町遺跡発掘調査報告書

磐井川流域関連一関公共下水道月町地区枝線工事に伴う発掘調査

発行年月日	令和3年3月29日
発行	一関市上下水道部下水道課 〒021-8501 岩手県一関市竹山町7-2 電話 (0191) 21-8572
編集	一関市教育委員会文化財課 〒021-8503 岩手県一関市竹山町7-5 電話 (0191) 26-0820
印刷	川嶋印刷株式会社 〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21 電話 (0191) 46-4161(代)